与論の十五夜踊

【所　在　地】大島郡与論町字城（与論十五夜踊保存会）
【種　　別】国指定無形民俗文化財
【指定年月日】平成５年 12 月 13 日

与論島の十五夜踊は，雨乞いの願いを込めた「アミタボウリ（雨賜ぼうり）」という一番組，二番組合同による踊りに始まり，以下，一番組の狂言と二番組の風流踊りとが交互に演じられる。

風流踊りは，踊り，唄それぞれに沖縄風のもの，大和風のものもあり，踊り手は，踊りによっては頭から布で顔をおおう「シファ」というカブリモノをかぶる。

狂言は，「三者囃子」，「二十四孝」，「町奉行」等で，台詞を中心に展開し，筋は大和の能狂言そのままのものや，沖縄の組踊りを組み直したものなどがある。演目によっては仮面を用いるものもあり，その中には，長さ 40cm ほどの大きな仮面「朝伊奈面」もある。

十五夜踊の最後は「六十節」で，これが始まると見物人も参加し，大きな輪となって踊り，やがて三線が「六調」に変わると，輪が崩れて大勢での乱舞となる。

「アミタボウリ」の際，先頭に大旗が掲げられるが，これは地元で豊年の神のように尊重されているもので，７ m ほどの竹を旗棹とし，最上端に竹輪を取り付け，たわわに実った稲穂をかたどった飾りを付ける。踊りの間に，この大旗が風などで折れたり倒れたりすることを最大の不吉としている。

この十五夜踊は，一説には，かつての与論島領主が，島民慰安，島中安穏，五穀豊穣のために，三人の息子に沖縄，大和，島内の芸能を集めさせて，永禄４（1561）年にまとめたものといわれ，また，三代目の領主が，天正 17（1589）年前後に組み立てたものともいわれている。

与論の十五夜踊は，大和と沖縄の芸能を取り込み，さらに当地独特の風を加えた民俗芸能であり，芸能の成立，変遷の過程さらに地域的特色を示すものである。